

# イエスの洗礼

マタイによる福音書 3：13－17



司祭 ヨハネ 井田 泉

顯現後第1主日・主イエス洗礼の日

2026年1月11日

聖光教会にて

今日の旧約聖書日課を聞いて思い出すことがあります。

「見よ、わたしの僕、わたしが支える者を。わたしが選び、喜びを迎える者を。彼の上にわたしの靈は置かれ……。彼は叫ばず、呼ばわらず、声を <sup>ちまた</sup>巷に響かせない。傷ついた葦を折ることなく、暗くなつてゆく灯心を消すことなく、裁きを導き出して、確かなものとする。」イザヤ書 42:1-3

これは 46 年前、わたしの司祭按手式で朗読された言葉です。その時の説教者は法用渉司祭（後、中部教区主教。故人）でした。わたしは司祭志願者として会衆席の最前列に座っていたのですが、チャンセルにおられた法用先生は説教の前、礼拝の進行中、かなり長い間ひざまずいて祈っておられました。その姿とイザヤ書の言葉が重なつて、今も思い出されます。感謝です。

このイザヤ書の言葉は、イエスの洗礼とつながっています。神が愛する僕に呼びかけ、ご自身の靈を与えられるからです。

さて今日は主イエス洗礼の日です。イエスの洗礼はわたしの洗礼の土台であり原点です。

「エルサレムとユダヤ全土から、また、ヨルダン川沿いの地方一帯から、人々がヨハネのもとに来て、罪を告白し、ヨルダン川で彼から洗礼を受けた。」マタイによる福音書 3:5-6

ヨハネが語るのを聞いて、人々は神を感じたのです。これまで信じてはいたけれどもありありとは感じていなかった神。そ

の神が生きておられる。しかも自分の前におられると感じたとき、畏れが生じ、心に痛みが起きました。自分の過ちと神への不誠実を知ったからです。人々はそのままではいられなかつた。ヨハネのところに行って、自分の罪を告白しました。ヨハネの前でヨルダン川の水に自分を沈めて、水から上がったとき、古い自分が死んで、新しく生きることを許された新しい自分が始まっていることを知りました。神の赦しを受けた平安と喜びが起きました。

そうしたある日、イエスが同じように洗礼を受けようとしてヨハネのもとにやって来ました。ヨハネは驚き、それを思いとどまらせようとしました。ヨハネはすでに、イエスが神から来られた特別な方であることを知っていたからです。ヨハネは言いました。

「わたしこそ、あなたから洗礼を受けるべきなのに、あなたが、わたしのところへ来られたのですか。」3:14

神の赦しを現実に人々にもたらすのはイエスであって、自分はそのための準備をしているに過ぎない、とヨハネは信じていたからです。けれどもイエスは強いてヨハネから洗礼を受けられました。

ここに非常に大切なことがこめられています。イエスは神の子として罪のない方であるのに、罪あるわたしたち人間と一つ

になられた、ということです。イエスは本来、人を赦して人を救う方であるのに、赦しを必要とする、救いを必要とするわたしたちと同じ立場に立ってくださった。イエスは言わば本来天の存在、天の方であるのに、地上に来られて、地の人となって、この地上に苦しむ人々と一つになられた。イエスはわたしたちの抱える困難、苦しみを分かってくださる。分かるだけではなく、わたしたちの困難と苦しみと一緒に引き受けてくださるのです。これはクリスマスの意味でもあります。

イエスの洗礼はわたしたちの洗礼の原点ですから、この場面をしっかりと見つめましょう。

「イエスは洗礼を受けると、すぐ水の中から上がられた。そのとき、（見よ！）天がイエスに向かって開いた。」3:16

これはどういうことでしょうか。天とは、神様の世界です。神様の世界がイエスに向かって開いた。神様がご自分をイエスに現された。けれども天はただイエスに向かってだけ開いたのではありません。そのとき、天はわたしたちに向かっても開いた。言い換えると、イエスはわたしたちのために天を開いてくださったのです。

そして何が起こったのでしょうか。

「イエスは、神の靈が鳩のように御自分の上に降って来るのを御覧になった。そのとき、（見よ！）『これはわたしの愛する子、わたしの心に適う者』<sup>かな</sup>と言う声が、天から聞こえた。」

「見よ！」は訳されていませんが、読者に注意を喚起する言葉です。

ここには二つのことが記されています。

第1は、イエスが神の靈を、聖靈を受けられたことです。聖靈とは、神の命、神の力です。イエスはご自分の使命を果たす力を与えられた。イエスは人として生まれ、人として生きられたのですから、人としての弱さと苦しみを負っておられました。疲れ果ててだれにも会いたくない、ということがありました。受難の前は、不安と迷いに襲われて、血の汗を流すほどに苦しんで祈られました。けれどもイエスは、洗礼において神の靈を受けられた。聖靈を宿し、聖靈の命に生かされておられたので、イエスには生涯、尽きない情熱があり、平安があり、神の喜びがあったのです。

第2は、イエスが洗礼に際して神の呼びかけを聞かれたことです。

「これはわたしの愛する子、わたしの心に適う者」

この呼びかけをとおして、天の父なる神の愛がイエスに注ぎ込まれ、またイエスの神への愛が溢れてきます。

注意深く読むと、このマタイ福音書では「これはわたしの愛する子」となっていますが、マルコとルカでは「あなたはわた

しの愛する子」となっています。

マルコとルカでは、神がイエスに直接「あなたは」と呼びかけている。おそらくこれが元の言葉でしょう。ところが、マタイでは「これは」となっています。神がこのイエスを皆に紹介しておられる。おそらくマタイ福音書記者はそのことを強調したかったのでしょう。「これは」「このイエスこそ、わたしの愛する子」。それを知ってほしい。

後半の「わたしの心にかな適う者」という訳は少々硬すぎます。「あなたはわたしの喜び」「わたしはあなたのがこの上なくうれしい」ということです。神がイエスの存在を喜ばれる。その喜びがほとばしった声です。

ところで、先ほどイエスの洗礼はわたしたちの洗礼の原点と言いました。どういうことかと言うと、イエスが洗礼において経験されたことは、わたしたちの洗礼においても与えられた、ということです。

第1に、イエスに降ってイエスに宿った神の靈、聖靈は、わたしたちにも宿ったのです。わたしたちも人として、疲れてだれにも会いたくないことがあります。不安にかられることがあります。迷いに苦しむことがあります。けれどもわたしたちにも聖靈が与えられている。わたしたちも神の愛、神の情熱を宿して

いる。ですからそれぞれに与えられた働きをなすことができるのです。

第2に、わたしたちも「これは（=あなたは）わたしの愛する子」という神様の呼びかけを受けました。今も神様はわたしたちのことを「愛する子」と呼びかけておられます。呼びかけられた以上は、事実わたしたちは「神の愛する子」とされた。されてしまった。だとすれば何を恐れることがあるでしょうか。何を心配することがあるでしょうか。わたしたちは神の愛していくくださる子なのです。しかも喜びをもって愛していくくださるのです。あなたの存在がうれしい、と。

洗礼のとき、そのようにはつきり感じたか感じなかつたかは問題ではありません。わたしなどは幼児洗礼ですから、まったく記憶にはありません。けれども洗礼というのは神様から与えられた客観的出来事です。この身に起こった、与えられてしまった事実です。神様が与えてくださった揺らぐことのない土台です。たとえわたし自身は危うくても脆弱くても、土台は確かなのです。

洗礼はわたしたちに与えられたかけがえのない恵みであり祝福です。そのことを繰り返し心に刻みましょう。

祈りましょう。

神様、あなたは洗礼によってわたしたちに聖靈を注ぎ、わたしたちを愛する子と呼びかけてくださいました。たとえわたしたちがそれを見失うことがあったとしても、あるいは過ちを犯すことがあったとしても、その事実は揺らぐことはありません。どうかその洗礼の恵みを繰り返し思い起こさせてください。喜ばせてください。そのためにわたしたちの心を聖靈によって呼び覚ましてください。わたしたちに託された使命を思わせてください。わたしたちの弱さを担うためにご自身洗礼を受けられたみ子イエス・キリストによってお願ひいたします。アーメン